リハビリテーション医療における安全管理・推進のためのガイドライン 2006

（日本リハビリテーション医学会安全管理のためのガイドライン策定委員会）2020 年２月現在第２版作成中

【積極的なリハを実施しない場合】

①安静時 Pulse （　）拍／分以下または（　）拍／分以上
②安静時 SBP（　）mmHg 以下または（　）mmHg 以上
③安静時 DBP（　）mmHg 以上
④（　）性狭心症の方
⑤（　）のある方で著しい徐脈または頻脈がある場合
⑥心筋梗塞発症直後で循環動態が不良な場合
⑦著しい（　）がある場合
⑧安静時（　）がある場合
⑨リハ実施前にすでに動悸・息切れ・胸痛のある場合
⑩（　）でめまい、冷や汗、嘔気などがある場合
⑪安静時 KT が （　）℃ 以上
⑫安静時 SpO_2（　）%以下

【途中でリハを中止する場合】

①（　）等度以上の呼吸困難、めまい、嘔気、狭心痛、頭痛、強い疲労感などが出現した場合
②Pulse が（　）拍／分を超えた場合
③運動時 SBP が （　）mmHg 以上、または DBP が（　）mmHg 以上上昇した場合
④頻呼吸（●●回／分以上）、息切れが出現した場合
⑤運動により（　）が増加した場合
⑥徐脈（Pulse＜●●回/min）が出現した場合
⑦意識状態の悪化

【いったんリハを中止し、回復を待って再開する場合】

①Pulse が運動前の（　） %を超えた場合。ただし（　）分間の安静で（　）%以下に戻らない時は以後のリハを中止するか、または極めて軽労作のものに切り替える
②Pulse が（　）拍／分を越えた場合
③ 1 分間（　）回以上の期外収縮が出現した場合
④軽い動悸、息切れが出現した場合

【その他の注意が必要な場合】

①（　）尿の出現
②喀痰量が増加している場合
③（　）増加している場合
④倦怠感がある場合
⑤食欲不振時・（　）時
⑥下肢の（　）が増加している場合

アンダーソン・土肥の基準

【運動を行わないほうがよい場合】

- 安静時 Pulse （　）拍 /分以上
- DBP（　）mmHg 以上
- SBP（　）mmHg 以上
- （　）以外の著しい不整脈
- 運動前すでに動悸、息切れのあるもの
- （　）性狭心症を現在有するもの
- 新鮮心筋梗塞（　）ヶ月以内のもの
- （　）性心不全の所見の明らかなもの →

フラミンガムうっ血性心不全診断基準

大項目を２項目、あるいは大項目を１項目および小項目を２項目を有するもの

大項目	小項目	大項目あるいは少項目
・発作性夜間呼吸困難あるいは起座呼吸 ・頸静脈怒張 ・ラ音聴取 ・心拡大 ・急性肺水腫 ・III音奔馬調律 ・静脈圧上昇＞16cmH2O ・循環時間≧25秒 ・肝頸静脈逆流	・足の浮腫 ・夜間の咳 ・労作時呼吸困難 ・肝腫大 ・胸水 ・肺活量最大量から1/3低下 ・頻脈（心拍≧120拍/分）	治療に反応して5日で4.5kg以上体重が減少した場合

（Mckee P.A. et al: The natual history of congestive heart failure: The Framingham Heart Study. N Engl J Med. 1971; 285: 1441-6）

北河内心不全レジストリ研究会HPより引用

【途中で運動を中止する場合】

- 運動中、（　）等度の呼吸困難、めまい、嘔気、狭心痛などが出現した場合
- 運動中、Pulse が（　）拍 /分を越えた場合
- 運動中、１分間（　）回以上の期外収縮が出現するか、または（　）脈性不整脈（心房細動、上室性または心室性頻脈など）あるいは徐脈が出現した場合
- 運動中、SBP（　）mmHg 以上または DBP（　）mmHg 以上上昇した場合

【次の場合は運動を一時中止し、回復を待って再開する】

- Pulse が運動時の（　）％を超えた場合。ただし（　）分間の安静で（　）％以下に戻らぬ場合は、以後の運動は中止するかまたは極めて軽労作のものに変更する
- Pulse が（　）拍 /分を越えた場合
- １分間に 10 回以下の（　）が出現した場合
- 軽い動悸、息切れを訴えた場合

離床の禁忌（AARC ClinicalPractice Guideline）

アメリカ呼吸ケア学会のガイドライン

【絶対禁忌】

・活動性出血

・不安定な循環動態（= ●●の状態）

１）血圧が極端に（　）く、不安定

２）強心昇圧剤（●●製剤）を使用しても収縮期血圧が（　）mmHg 以下

３）乏尿：時間尿（　）ml 以下

４）末梢循環不全

①交感神経過緊張（手足の温度低下・●●・●●）

②（　）性アシドーシス（安静時でもアシドーシスになってしまうほど悪い）

③意識障害（中枢神経症状、錯乱・傾眠・昏睡）

・頭部または頸部損傷（安定するまで）

【相対禁忌】

・不整脈

・コントロール不良な（　）血圧

・頭蓋内圧亢進状態（ICP）＞20mmHg

・肺塞栓症

・肋骨骨折（フレイルチェストの有無を問わず）

・コントロール不良な（　）

・姿勢の変化に耐えられない高齢者、不穏、不安の強い患者

心疾患患者に対する運動療法の適応と禁忌

アメリカスポーツ医学会（ACSM）

【運動療法の適応】

・医学的に安定した発症後の心筋梗塞
・（　）狭心症
・冠動脈バイパス術後
・PTCA（経皮的冠動脈形成術）または他のカテーテル治療後
・（　）性心不全
・心筋症
・心臓または他の臓器移植
・弁膜症手術もしくはペースメーカー挿入術を含む心臓手術
・（　）動脈疾患
・手術困難な（　）リスク心臓疾患
・心臓突然死症候群
・末期腎臓疾患
・糖尿病、脂質異常症、高血圧などの（　）動脈疾患危険因子を有する患者
・体系化された運動療法プログラムや患者教育の適応のある患者（主治医との心臓リハビリテーションチームの同意が必要）

【運動療法の禁忌】

・（　）狭心症
・安静時 SBP が（　）mmHg を超える、または安静時 DBP が（　）mmHg を超える場合。ただし症例ごとに検討する。
・（　）mmHg を超える起立性低血圧で症状を伴う。
・重篤な大動脈弁狭窄症（弁口面積が●●cm^2 未満で最大圧較差が●●mmHg を超える）
・急性の全身性疾患または発熱
・コントロールされていない心房または心室性不整脈
・コントロールされていない心房性頻脈（＞●●bpm）
・（　）性心不全
・第（　）度房室ブロック（ペースメーカー非挿入）
・活動性心膜炎または心筋炎
・亜急性期の塞栓症
・血栓性静脈炎
・安静時 ST 低下が（　）mm を超える
・コントロールされていない糖尿病（血糖値●●mg/dL を超える、または●●mg/dL を超えてケトーシスを伴う）
・運動を禁止されている重度な整形外科疾患
・急性甲状腺炎、低カリウム血症、高カリウム血症や脱水といった他の代謝性病態

心リハ関係

日本心臓リハビリテーション学会

【心臓リハビリテーションの目的（効果）】

①（　）循環や（　）筋機能、（　）灌流量の増加により運動耐容能が増加する
②日常生活同一労作における（　）減少、換気量低下により症状軽減、QOL 改善につながる
③（　）収縮機能および（　）悪化を予防し、左室（　）機能を改善する
④冠動脈病変の進行抑制および冠動脈、末梢動脈血管（　）機能、心灌流を改善し（　）発生率を減少させる
⑤冠動脈疾患および虚血性心不全における心不全増悪による（　）を改善する
⑥安静時・運動時の末梢血管（　）の減少、および（　）神経緊張低下により（　）期血圧を低下させる
⑦（　）コレステロールを上昇、中性脂肪を（　）させる
⑧CRP、（　）性サイトカインの減少など（　）関連指標を改善する
⑨血小板（　）能を低下させる
⑩圧受容体反射感受性（BRS：Baroreflex Sensitivity）を（　）する
⑪骨格筋（　）密度増加。（　）型から（　）型筋線維に再変換

【心臓リハビリテーションの適応】

・心不全
・心筋梗塞
・狭心症
・下肢閉塞性動脈硬化症（ASO）
・冠動脈バイパス術（CABG）後
・大動脈解離保存
・人工血管置換術後
・弁置換術後

【心臓リハビリテーションの絶対禁忌】

・（　）日以内の急性心筋梗塞
・内科治療により安定していない（　）狭心症
・自覚症状または血行動態異常の原因となる不良の不整脈
・症候性の（　）度大動脈弁狭窄
・急性の肺塞栓または肺梗塞
・急性（　）解離

【相対的禁忌（実施の前に Dr と相談）**】**

・左主幹部の狭窄
・（　）等度の狭窄性弁膜症（弁口面積●●未満）
・電解質異常

・重症高血圧（SBP＞●●mmHg または DBP>●●mmHg）
・頻脈性または徐脈性不整脈
・運動負荷が行えないような精神的あるいは身体的障害
・（　）度房室ブロック

【レジスタンストレーニング（RT）の絶対的禁忌】
・不安定な（　）動脈疾患
・コントロールされていない不整脈
・平均肺動脈圧（mPAP）が（　）mmHg 以上の重篤な肺高血圧症
・重篤で症状のある大動脈弁狭窄症
・心内膜炎、心外膜炎、急性心筋炎
・コントロールされていない高血圧（　）/（　）mmHg 以上
・大動脈解離
・（　）症候群
・活動性増殖性網膜症、中等度から悪化傾向にある非増殖性（　）性網膜症患者に対する高強度（　）％1 RM ～（　）％1RM のレジスタンストレーニング

【レジスタンストレーニング（RT）の相対的禁忌（実施の前に Dr と相談）**】**
・冠動脈疾患の主要なリスクファクターがある場合
・（　）の持病がある
・コントロールされていない高血圧（　）/（　）mmHg 以上
・（　）METs 以上で運動耐容能（endurance）が低い
・筋骨格系の制限がある
・ペースメーカーや除細動器の挿入者